

4 外部書庫からの戻し作業

2017年に外部書庫として管財部が用意してくれた別館T（綱町別館）は、キャンパスから1km程離れた3階建ての住宅用建物で、そこに書架を設置して、図書館洋書（請求記号B000-B229）の62,000冊を各階に配置していた。もう1か所、管財部により、慶應義塾女子高等学校（以下「女子高」とする）に併設する建物の地下に別館J（女子高別館）を提供してもらっていた。ここには経済学部図書（請求記号EC）の一部14,900冊と、準貴重書6,200冊を配置していた。この2か所の書庫には工事期間中の2年半、ほぼ毎日スタッフが出向いて資料の出し入れを行ったのである。

別館Tの再配置先は、書架幅の種類が複雑な旧館地下2階第三書庫と1階第二書庫であった。そこには元々遠山音楽文庫図書や新聞製本版など様々な資料が置いてあり、それらを順に旧館内の別の場所や山中資料センター等の外部書庫へ再配置した後、8月初旬の1週間をかけて作業を行った。エレベータはなく外に階段があり、真夏の酷暑の中、段ボールを運んでいただいた業者さんには大変感謝している。

別館Jの資料は、改修前と同じ旧館2階第一書庫へ戻すため、6月下旬から7月初旬の女子高の授業のない日を選んで移動作業を実施した。ただし、準貴重書は再配置先の整備の都合で翌年3月に作業することになったため、女子高に数か月間残すことになった。その間も温湿度管理に万全を期していたものの、全体空調の関係で予期せぬ結露によるカビが発生してしまったのは残念なことであった。幸いにも小規模だったため丁寧にカビを除去し、専門業者による除菌も経て新館地下4階へ再配置した。

もう1か所の別置場所として、和装本81,000冊と洋新聞製本版3,600冊を保管していた外部書庫がある。有料だが必要な資料を届けてくれるサービス付きのため、書庫まで取りに行く手間が省け重宝していた。保管料は、管財部が特別に予算措置をしてくれていたが、旧館完成後には予算措置が終了してしまうため、まずは和装本を閉架書庫である新研究室棟地下2階へ再配置した。和装本の元の配置場所である旧館の書庫は開架式であり、貴重な和装本の無断持ち出しを防ぐために、受付カウンター横にロッカーを設置し、カバンなど手荷物の持ち込みは禁止としている。再配置により和装本が旧館からなく

なったことは、ロッカー設置の必要性やカウンターの在り方を検討するうえで重要な要素となった。

一方、洋新聞製本版はこの2年半の間、外部書庫から取り寄せる事はほとんどなかったが、新聞製本版を書架に並べるには、通常の3倍の書架数を確保する必要があることから、管財部の予算措置がなくなっても、三田メディアセンターで保管料を払い続け、外部書庫にそのまま置いておくことにした。中国・韓国語新聞製本版3,500冊も追加で同じ外部書庫へ保管することにした。ただ、保管料をいつまでも払い続けるわけにはいかないため、製本版新聞の保存については今後の課題とし数年以内には結論を出す予定である。

5 その他の再配置

旧館地下1階の第一書庫北、南および第二書庫の3か所に新たに集密書架を設置した。いずれの書庫も天井が低く、ところどころに飾りのような梁があり、当初予定していた数を設置できない箇所が出て、収容能力が予定より小さくなってしまった。しかも、集密書架の場合、大型資料は開閉時に影響するため、奥行き幅広い棚板を設置するか、別の書架に別置しなければならない。対応策は考えていたが、実際に作業をしてみると予想以上に大型資料が多く、しかたなく集密書架にそのまま配置する資料が出てしまった。特に、自然科学系の図書館洋書（請求記号B400-B599）は変形大型サイズが多く、今後さらに配置場所を検討する必要がある。また、増加が著しい文学部図書（請求記号CL）は作業日程に制約があり、請求記号の区切りごとに増加分の空きスペースをとることができず、最後尾の書架を大量に空けて作業を行ったが、作業後まもなく再移動をすることになってしまった。

旧館1階は、最も増加傾向の著しい社会学系の図書館洋書（請求記号B200-B299, B330-B399）を再配置するため、最下段の棚を全て空けることとした。また、将来1階へカウンターを移設することも考慮してその付近の書架は使用しないようにした。

旧館2階は、再配置以前から経済学部図書のフロアであったが、一部に、請求記号順が入り組んだわかりにくい配架場所があり、また1階へのカウンター移設を考慮して、全体的に資料を少しずつずらす作業を行った。

旧館以外に南館図書室（以下「南館」とする）でも再配置作業を行った。南館には、法学部図書（請求記号JR, PL）だけではなく商学部図書（請求記号BC）も置いていた。経済学部図書は商学部図書と主題が近く、資料の重複も多く見られる。両方のコレクションを利用する利用者にとって、それらが異なる建物に別々に配架されている状況は、非常に不便であった。一方、法学関係の洋書（請求記号B300～B329）は旧館にあるため、これを商学部図書と入れ替えることで、経済・商学部と法学部の3学部の利用者の利便性が向上することになった。南館は電動式集密書架であり、書架幅や段数が異なるため、旧館同様書架マップの作成などに苦勞を伴ったが、南館の空きスペースが拡大したことにより、増加傾向が続く法学部洋書のスペースに余裕ができる結果となったことは喜ばしい。

6 その他の様々な変化

旧館の改修工事では、免震機能導入や外壁補修などの他、内部施設の改修も行われた。3階第三書庫にあるトイレの改修もその一つである。旧式で薄暗く機能面や防犯面での評判が悪かったため、最新式になるのは誰もが歓迎であったが、資料再配置の作業時期と同じ夏季に行われたため、配管近くの資料を一時的に移動させなければならなかったり、作業員の出入りが重なるなど予想外の事態が起きた。

新研究室棟と旧館をつなぐ渡り廊下の撤去も大きな改修の一つであった。教員が雨に濡れずに図書館へ行くための通路として長い間利用されてきたが、旧館側の地下に免震装置を入れたため段差が生じ、やむなく撤去となった。2か所を行き来する教員からは、特に和装本などを運ぶ際にはビニールバッグのようなものがあるとよいなどの意見が出た。スタッフも、天候によっては出納の際に本を傷めないよう注意しなければならなくなった。しかし、カウンターを3階から1階へ移設する計画案がこれにより大きく前進した。

また、旧館建物の図書館入口扉とスロープも改修となった。元のスロープは、第二書庫と第三書庫の間の狭い隙間に設置されていたため、折り返す構造であり、ブックトラックの通行が困難であったが、改修後は一直線に長く伸びることで折り返しはなくなり少し便利になった。ただし、傾斜を緩やかにす

るため、スロープは長くなり、重いブックトラックの通行には現在でも多少の困難は伴うようだ。

さらに、改修後に全ての鍵の付け替えが行われた。これまでは設置年の異なる第一書庫、第二書庫、第三書庫それぞれの入口に種類の違う鍵が取り付けられていたうえ、倉庫などの鍵も存在するため管理が大変であった。開閉館作業用にマスターキーを作成していたが、それも集約されることになり、鍵の管理が非常にわかりやすくなった。

7 利用者への広報など

資料再配置の実施にあたって、利用者の混乱を避けるために広報にはできる限り力を入れた。作業開始の1か月前には館内の資料近辺に掲示を出し、Webサイトでは、全体の再配置計画と共にカレンダー形式で作業日程を随時更新しながら掲載していた。しかし、図書館新システムへの移行時期と重なったため、配置場所データの一括変更は、新システム稼働の数か月後に行われることになり、資料が再配置された後もKOSMOSの配置場所は以前の場所が表示されることになり、利用者から問い合わせを受けることもあった。新システムが落ち着いた11月以降に順次データ変更が行われ年度内には完了した。

8 おわりに

計画どおりに再配置作業は終了し、管財部が用意してくれた2か所の外部書庫は2019年度中に返却することができた。その後も大きな混乱はなく現在に至っている。再配置した資料のさらなる移動、有料の外部書庫を今後どうするかなど、いくつか残った課題を少しずつ解決していかなければならない。3階から1階へカウンターを移設し、3階には書架を増設する計画が現在進行中である。図書館施設以外の部屋の改修も進行しており、今後三田キャンパスにおける旧館の役割はさらに大きくなっていくと思われる。重要文化財に指定され、慶應義塾大学のシンボルである旧館は、外側だけでなく、内側も充実していくことで、これからも永く愛され続けるであろう。

参考文献

- 1) 木下和彦. 図書館旧館改修工事と資料移転. MediaNet. 2017, No.24, p.32-35.